「世界で活躍する仕事100 10代からの国際協力キャリアナビ」

編者：三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング
出版：東洋経済新報社
発行：2018年７月19日



私は20代の頃、青年海外協力隊員として大洋州のミクロネシア連邦という国で、２年間国際ボランティアをしたことがある。青年海外協力隊は、ODA（政府開発援助）の一環としてJICA（ジャイカ：国際協力機構）が実施している、開発途上国へのボランティア派遣制度である。２年間の任期が終わりに近づいたころ、同期隊員たちと「帰国後どうするか」を話していると、「ADB（アジア開発銀行）で働くのが目標」「海外の大学院で栄養学を研究する」など、多くの人が協力隊員の経験をもとに、次のキャリアへ進む計画を立てていた。当時、現職派遣教員として参加し、帰国後も学校現場に戻ることが決まっていた私は、「進化」していく同期隊員たちに驚き、自分も頑張らなければと強く思った記憶がある。

国際協力の世界では、この「進化し続ける」ということが当たり前になっている。ほとんどの仕事が数年の任期付きで、終身雇用のポストはないに等しい。各人が常に自己投資、自己研鑽に励み、組織を渡り歩き、時には独立するなどして経験を重ねていく。まさに「起業家精神」をもって、組織に頼らずに生き抜く術を身に付けるよう努力を続けているのである。「終身雇用の時代は終わったんだよ」と授業で生徒に伝えながら、内心は「退職まで一つの会社で勤めあげるのも大切」だと思っていた私にとって、国際協力分野の人々の働き方は、大きな衝撃であった。学校教育→就職→退職、という流れはこの世界では通用しない。必要に応じて勉強と転職を繰り返す未来の働き方がすでに当たり前になっているのが、国際協力の世界なのだ。これを高校生たちに伝えるために、何か手助けになるものはないかと考える中で出会ったのがこの本である。

本書は、10代から20代前半の若者に向けて、国際協力分野では具体的にどのような仕事があるのかを紹介し、そのキャリアに向かう道筋を示している。パートⅠ～Ⅲの３つの部分から構成されている。

パートⅠ「国際協力に携わる100の仕事」では、各種国際機関のほか、公務員や政府関係機関、大学や民間企業、NGOなど、100通りの国際協力の形を提示している。国際協力の仕事というと国連やJICAがまず思い浮かぶが、本書ではむしろそれ以外の、「こんな仕事もあるのか」と思えるような組織や団体・働き方を積極的に紹介しているのが興味深い。また、「会計事務所や監査法人から国際協力」「国際協力につながる社会起業家」など、多様な職業や立場から国際協力にアプローチできる可能性も示している。

パートⅡ「国際協力キャリアを歩む」では、中学生から大学院生まで、それぞれの学生からの質問に答える形式で、国際協力の舞台で活躍する大人たちからのアドバイスが書かれている。「人づきあいが下手なぼく・わたしでもやっていけますか（中学生）」から、「国際協力関係の就職活動やインターンシップについて（大学院生）」まで、具体的な事例を交え幅広く答えている。中高生の質問に対する答えは、私からするとやや「真面目過ぎる」と思えるところもあるが、各分野で実際に経験を積んできた執筆者たちの声は、我々教員よりも生徒たちに届くのかもしれない。

なお、このパートでは、実際に仕事に就いたあと、キャリアアップをどう進めるか、もしくはキャリアを変える（他分野に転職する）ときは、といったことにも言及されている。

パートⅢ「INDEX式 君の疑問とやる気から考えよう」は索引を兼ねており、これまでに紹介した仕事を「難民を助けたい」「開発途上国のインフラを整備したい」のように、目的別に分類している。さらに、国際協力関係の学部学科を設置する大学・大学院（国内・海外）のリストや、それぞれの仕事をより詳しく調べられる文献が紹介されている。協力隊員時代、同期たちの会話によく出てきていた大学や機関の名前も多く、現場の声をもとにリストアップされたものだということがよく分かる。

ビジネスで社会を変える、という社会起業家の理念を持って活躍している人も多い国際協力の分野。ホームルームで、授業で、進路指導で、「世界で何かしてみたい」と言う生徒に出会った時のために、この本を手元に置いておきたい。

起業教育研究会　企画委員
京都府立京都すばる高等学校　企画科　小川建治